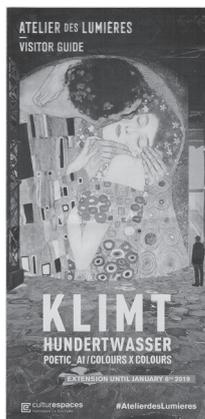


プロジェクションマッピング (Projection Mapping) *1を使用した映像表現は、以前からライブコンサートやイベントなどで幅広く使用され、筆者も幾つかの映像を実際に見た経験がある。映像を写す対象が平面スクリーンではなく、巨大な建物から、室内空間、人や木々まで多岐に及ぶことに新しさや驚きを感じたことが強く印象に残っている。しかし、昨年パリにオープンした、プロジェクションマッピングによるアートミュージアムを訪れ、改めてアートの世界の奥深さに気付かされた。

そのミュージアムの名は「ラトリエ・デ・リュメール (ATELIER DES LUMIERES) *2」。19世紀から鋳物工場として使用されていた建物を、ミュージアムとして再生させた。チケット売り場の奥にある扉を開き、一步スタジオ内に入ると、映像と音楽で成り立つ別世界に入り込む。広大なスペース*3を囲む壁や柱、床の全てを覆い尽くす多様な映像が、音楽と共に溢れるように流れ続ける。映像が様々な方向から色や形、大きさを変化させながら、部分的に、あるいは全体に、絶え間なく流れ、消えては表れる。10メートルの壁の高さの上下方向から表れてくる映像はそれぞれ圧巻だ。広大なスペースのどこからこれらの映像を見るのか、隅から見るのか、中央付近なのか、立って見るのか、椅子に座るのか、床に座り込むのか、または歩きながら見るのか、どちらに視線を向けるのか、様々な視点から見る映像はそれぞれ印象を異にする。奥には階段があり、

2階から映像に満ちた空間全体を見下ろすこともできる。スタジオの中央付近には円筒形の仕切られた小スペースがあり、広狭それぞれの空間を出入りすることができる。また、この小空間の存在により、広大なスペースの周縁を回廊のように回ることができる。



左/展覧会パンフレット (中央は代表作の「接吻」1908年)
上/会場内風景 (筆者撮影)

デザインで伝える メッセージ5 ～プロジェクションマッピング による新たなアートの世界～

渡邊知子国際特許事務所 代表
弁理士 渡邊知子

スタジオ内では、テーマが異なるものも含め複数のプログラムが絶え間なく繰り返し流されている。筆者が訪れた時はグスタフ・クリムト (Gustav Klimt) *4のプログラムが上映されていた。金色を多用した、細かな幾何学的装飾模様と、平面的に描かれながらも官能的な女性たちは、クリムトの作品として印象深い。この時まで特に惹かれるものは無かった。しかし、彼の作品中の表現によって広大な空間が全て覆われ、そこに表れる彼が描いた女性達は、こちらに視線を送り何か語りかけているようだ。無数の金色の破片が舞い、美しい花々が全ての空間を覆い尽くす。そして「接吻」のタイトルで知られる金色に覆われ抱き合う美しい男女の巨大な映像が、こちらの壁、あちらの壁の下から徐々に表れてくる。これらの映像は10分程度だと思われるが、そこにはクリムトが描いた世界が、彼が生きた時代と共に満ち溢れる。映像の中でクリムト自身も猫を抱いたモノクロの写真で登場する。一人の画家の熱を帯びた思いが長い年月を経て

蘇る。改めて、コンピュータ技術の進展は、過去の名作をも新たに深化させることに驚きと深い感動を感じた。

今年このミュージアムでは、ヴァン・ゴッホと日本をテーマにしたエキシビション*5が開催される。日本での開催が望まれる。

*1 プロジェクションマッピングは、コンピュータで作成したCGとプロジェクタ等の映写機器を用い、建物や物体、あるいは空間などに対して映像を映し、時には音と同期させる技術の総称であり、平面ではなく立体物に映像を貼り合わせる(マッピング)ことが特徴(ウィキペディア)。

*2 ラトリエ・デ・リュメール (ATELIER DES LUMIERES) <https://www.atelier-lumieres.com/>

*3 床面積2,000m²、映像投影面積3,300m²、140のプロジェクタと50のスピーカーが使用されている

*4 ウィーン分離派のオーストリアの画家(1862-1918年)

*5 2019年2月22日～12月31日 "Van Gogh, Stary Night", "Dreamed Japan"